



本年度の同窓会の大きな事業として同窓会名簿の発行があります。本年五月三十一日現在の同窓生（生存者数、高等小学校を除く）は九九六六名、そのうち72%、七二二〇名の方の住所が登録されています。

昨年暮れ、同窓生の皆様方に調査票をお送りしましたが、それに対して約30%に上る約二三〇〇名の方が回答して下さいました。ご協力ありがとうございました。

さて、今年も附属小学校の桜は見事な花を咲かせていました。ところが、四月下旬に小学校を訪れると、何本もの桜の木の幹に「あぶない 木にちかづかないで 木がくさっているのだとおれるかもしれない」と書いたポスターが表示されていました。栗原副校長に伺ったところ、一八〇本ある桜の内三十一本が危険と診断され、やがて伐採されることになるそうです。

桜の木が一八〇本もあったとは驚きでした。なぜこれほど桜の木があるのか、附小に一九四七年から一九七八年まで勤務された伴憲三郎先生に伺いました。

深沢に移転した当時は、元々が畑だったため校庭には全く日陰がなかったそうです。そこで、子どもたちのために日陰を作ろうと、環境整備の一環として校庭の周囲を中心に桜の木を植えたのだそうです。桜の若木は、藤棚を下馬から深沢に移すのに活躍された梅沢石庭造園さんをお願いして調達したそうです。

やがて立派に花を咲かせるようになると、近隣の方がお花見をできるように校庭を開放したこともあったそうです。また、毎年新入生には入学記念に桜の苗木を渡していたと

附小と桜

幹事長 森 昭彦

藤棚 49号

世田谷区深沢 4-10-1
東京学芸大附属世田谷小学校内
青山附属同窓会
<http://aoyama-dosokai.jp>
青山附属同窓会 検索

発行人 森 昭彦
編集人 齊藤研一

附小さくらプロジェクト 事務局メンバー募集のお知らせ

現在、附属小学校では、敷地内の桜の樹木の寿命が近づき、新しい苗木の植樹が必要になっています。附小の予算では対応が限られ、将来、春に今までのように見事な桜が咲く状況を維持できなくなる可能性があります。

そこで、同窓会では同窓生に声掛けを行い、植樹活動を行いたいと考え、今後、その事務局と一緒に活動していただける方を募集します。ご協力いただける方は、下記までご連絡下さい。

同窓会常任幹事 一力健一郎（1975年卒）
連絡先：onpower915@gmail.com

のことですが、入学の際に桜の木をもらった同窓生の方、その後どうされたか、今どうなっているか、思い出をお寄せいただきたいと思います。

今の深沢校舎への移転開始が一九五六年ですから、その頃植えられた桜の樹齢は六〇年を超えることとなります。

いわれていきますので、学校の桜に寿命が来たのもやむを得ないのでしよう。伐採に備えて、PTAとOBのクラブ青山キッカーズの方々が、若木を植樹されているそうです。

毎年子どもたちが桜の花を楽しめるように、また学校の緑を守るためにも同窓会として何かできることはないか考えようと思います。

附属小学校の近況

副校長 栗原正治

2017

同窓会の皆様、いつも附属小学校をあたたく見まもりご支援いただいております。ありがとうございます。

開校百四十二年目の春を迎えました。新一年生の入学の会。校門をくぐる新入生を満開の桜が出迎えました。

昨年度末に四十人学級の六年生が卒業し、全クラスが三十五人学級となりました。



近隣の公立校が児童数増に対応ご苦労されている中、本校はやや児童数スリムとなりましたが、先輩方が築いてくださった教育伝統校としての存在感は大々となるよう、さらなる発展をめざし教職員一同研修研鑽に努めております。

学校独自のいわゆる学校研究のほかにも、本学を含めた諸大学や他附属校との連携研

究、地域の研修機関としてのあり方提案などにも力を入れてまいります。

風薫る五月、藤棚には見事に花房が下がり、学校は運動会に向けて動き出しております。校庭に目をやれば、低学年の六クラスが輪になって演技を練習しています。

話を集中して聞く耳、自分たちで適切な間合いをとりフォーメーションを確かめる目と、その自発的な探究の姿に感心します。子どもはもともと学びへの好奇心や意欲をふんだんに持っているのだということがわかります。

学校研究のキーワードは近年ずっと「学び続ける共同体としての学校の創造」です。できた・わかった・よかった、でゴールが閉じてしまうような学習では、探究的で向上的な目標観や評価観を養えるようにはなりません。ゴールのように見えたはじめの目標に近づいてみると、次の課題が見えてくる。そのような授業づくりをしようと、我々の研究姿勢も前進的にと心がけております。

【先生の異動】

☆お送りした先生

▽大塚健太郎先生

附属間の人事交流で三年間の在職でした。タフであり軸がぶれない抜群の信頼感、険しい道のりも一緒にいると安心できる大塚先生のことを「ランドクルーザー」と例える声もありました。その例え通り、山岳ガイドとしての長いキャリアもお持ちです。

登る山が高ければ高いほど、慎重な判断や謙虚な姿勢が必要です。過剰な自信は即危険につながります。山を含め自然に対して謙虚であり敬う気持ちをお忘れなスピリットは、子どもに対しても同じで、子どもに常に丁寧であり、大切にする先生です。

小金井小学校に戻られましたが、今後はそれぞれの学校の良さをつなぐガイド役を果たしていきたいと宣言されていました。心強いです。

【編集部からのおたずねに ことえて】

ことえて

本誌編集部より、「近年、児童の登下校中の安全対策（交通事故、誘拐）は、どうされていますか」とのお尋ねをいただきました。いくつか取り組みがございますので、箇条書きにしてみます。

- 玉川警察署より講師を派遣していただいた安全教室の開催。

- 登下校地域班単位での安全指導（親子避難訓練等）。

- PTA生活指導部による登下校状況調査の実施。また、東深沢小学校との地域合同安全バトロールの実施。

- 地域学校との連携による安全ネットワークづくり（今年、本校は世田谷区国私立学校安全懇談会の幹事学校です）。

これで安心・万全という対策はありませんが、学校だからできる子ども自身を強く育てていくという使命に責任を果たしつつ、よりよい社会づくりの柱になる学校でもありたいと考えております。





いきものがかり

元教師 荒井 孝



私は昭和三十九年九月から六十二年の三月までの二十二年七か月を附属小学校で過ごさせていただきました。

初めの半年間は、週に三日ほどの勤務でした。昭和三十九年といえますと東京オリンピックが開催された年で、十月には子供たちを連れて駒沢の競技場へサッカーの試合を観に行きました。観客席を埋めるために、近隣の学校に動員令があったらしいのです。

教室で子供たちと触れ合う前に私に課せられた最初の仕事は、当時若手の教員の半分で組織していた「青進会」が、開業三日目の東海道新幹線で静岡まで行くための切符の手配でした。幸い何とか切符の方は入手することができたのですが、高速で走る新幹線が不安だったのを覚えています。話は変わりますが、今は放牧中とのことで姿を見せませんが、若者に人気のある三人組の「いきものがかり」とい

う音楽グループがあります。

面白い名前なので調べてみたら、グループの男性二人が小学校からの同級生で、一年生の時に金魚に餌を与える「いきものがかり」だったことから名付けたとのことでした。

私が附属小学校で過ごした二十二年余の生活は、まさにこの「いきものがかり」だったような気がします。子供たちが生き物と接することはいろいろな意味で貴重なことで、できるだけその機会を持たせたいと願って、様々な動物の飼育に取り組んだのでした。

昇降口の近くの廊下には水槽を並べて、アオダイショウ、ヤマカガシなどの蛇や、スッポン、ナマズ、イモリ、カメ、ウナギのシラス、そして熱帯魚など、にぎやかな水族館を作りました。蛇やスッポン、ナマズなどは生きた餌が必要なので、給餌は子供たちが下校した後でしかできませんでした。それに、誤って子供た



ちが水槽に手を入れると危険なので、厳重にふたをするなど管理には気を使いました。

理科室の前の中庭では、ニワトリ、ウサギをはじめ、チャボ、アヒル、クジャク、インコ、ジュウシマツなどの鳥類や、ハムスター、モルモット、ハツカネズミなどが飼育され、子供たちの相手をしてくれました。

ある日、登校してくる子供たちが騒いでいるので何かといてみると、生後間もないかわいい子犬と一緒に登校してきていました。子供たちの希望は学校で飼うことでしたが、さすがの私も躊躇せざるを得ませんでした。そこで、どうしても飼いたい主が見つからなかったときは学校で飼うということで子供たちを納得させ、飼い主探しを始めました。交番に頼んだり、近隣にポス

ターを貼ったりして捜したのですが、どうしても見つからず、やむなく学校での飼育が始まりました。

子供たちが付けた名前は「デラ」。十数年やさしく接してくれた新しい飼い主に引き取られるまで、給食の残りで二年半の学校での生活が始まりました。デラは子供たちに極めて従順で、他校の子供が来ても決して吠えませんでした。夏期の休みの時は、子供たちの決めたスケジュールに従って子供たちの家を四・五日ずつの回り持ちで過ごし、九月になると丸々と太って帰ってきました。学校で飼われている間はセラピー犬としても十分にその役目を果たしてくれていたようでした。

二年生は、理科の学習指導計画の中に「藤が池のかいほり」がありました。校門を入ってすぐ右側にある藤が池は、学校にある池としては極めて秀逸で、その後いろいろな機会に紹介してきましたが、ザリガニなどが毎年増えていて、子供たちの格好の相手をして

くれていました。

六月末になると、この池のかいほりが二年生の理科の学習になります。予め古くなった運動靴を各家庭で一足取っておいてもらって、靴下、古くなった運動靴、靴下の順に履いて池に入り、水をかい出して中の生き物を捕まえるという活動が行われました。はじめは池に入るのを躊躇していた子どもたちも、時間がたつと頭から泥んこになって生き物探しに熱中してくれました。捕まえた生き物は、数日間教室で飼って観察し、その間に池を清掃して新しい水をはり、教室からの生き物を放してまた新しい一年が始まるという「藤が池」でした。

昨今、鳥インフルエンザなどが問題になり、学校での動物の飼育が難しくなってきました。生き物との触れ合いを通して培われる子供たちの心の教育は極めて大切な要素を持っていると思うので、何もない飼育舎を見るとさみしさを感じるのには私だけではないと思うのですが。

先生方との出会いに感謝

一九九七年(平成九年)卒 二組 大塚 裕太郎

「校庭にアスレチックがあった広いから」。それが僕の附属世田谷小学校に入学を決めた理由だった。小学校を卒業してから今年でちょうど二十年が経つが、今楽しく日々を過ごしているのは、間違いなくあの時のこの選択のおかげだと思う。

小学校生活では、数々の先生方にご迷惑をおかけした。

ニワトリを観察している間に鳥小屋で寝てしまい、学校中を先生方に探させてしまった事。猫を追いかけていて遅刻し、おまわりさんに連れられて登校した事。数えればきりがない。母は小学校に行つて先生方に頭を下げない日は無かったと言っている。

僕のポジティブな解釈では好奇心旺盛な子供、世間の一般的な解釈では世話の焼ける問題児。そんな僕にも興味を持ち、自我形成を手伝ってくださった先生方には感謝して

もし尽せない。附属小学校の先生方でなければ、きっと僕は厄介者として扱われ、自分に自信を持たない子供になっていただろう。

液体同士の混ざって色が変わる事や、レモンから電池を作れる事が面白くて勝手に理科室で実験をしていた僕に、わざわざ自宅まで中学校の理科の教科書を届けてくれた田中先生のおかげで、僕は勉強に興味を持ち、理系で大学院まで学び続ける事ができた。

僕は今、ニューヨークのヘッジファンドで株に投資する仕事をしている。ヘッジファンドと言うと、きつと悪いイメージが日本では付きまといまうと思うが、僕にとっては



クラス会開催の報告記事を募集しています！
掲載を希望するクラスは、ハガキかメールで、
同窓会までご一報ください。
後日、折り返しご連絡いたします。

同窓会メールアドレス

aoyama-dosokai@edit.ne.jp

最高に楽しい仕事だ。好奇心を持って会社や業界について調査を行い、まだ大勢の人が気づいていないアイデアを先に見つける事でお金を生み出す、投資とはそういうゲームだと僕は思う。

そして、これから人口増による経済成長が見込めない日本で、金融資本を生かして富を築く能力は、今後ますます重要になると僕は信じている。自分が日々の仕事を楽しき追求した結果、日本一の先生方に育てていただいた恩を日本社会に返せる日が来れば、これ以上の喜びは無い。

クラスメートとの絆

一九五七年(昭和三十三年)卒 二組 (内海) 石谷 尚子

卒業して六十年になります。プもいくつかあります。

が、附属小学校での生活は、思い出というよりは、つい最近の出来事のように、はっきりと覚えています。厳めしい大学の建物と同じ敷地内にあった下馬校舎。雲雀が飛び交う麦畑に囲まれたのどかな深沢新校舎。個性豊かな先生方。学芸会、音楽会、運動会、クラス毎のお楽しみ会。特に同級生のことは、それぞれの性格からエピソードまで、何もかもわかっていて、家族のような親近感を覚えます。

友達のことをこんなによく記憶しているのは、入学してから卒業まで、組み替えが一度もなかったことが大きいと思います。六年間、毎日毎日、いっしょに生活していたのですから、忘れようがありません。今もクラス会で顔を合わせれば、一足飛びに小学生。今年春のクラス会は、鎌倉散策を楽しみました。それぞれの趣味で意気投合し、いまだに仲良く楽しんでいるグループもいくつかあります。

私の場合は、それに加え、クラスメートと一緒にボランティア活動をしているので、月に一、二回はワイワイ、ガヤガヤと集まり、メールは毎日飛び交い、ますます強い絆で結びついています。

十五年ほど前に、難民を支援する活動を始めたところ、小学校や附属中学のクラスメート、先輩、後輩が加わってくださり、NPO法人難民自立支援ネットワーク(RENN)を立ち上げることができました。日本で暮らしている難民の自立に向けた支援や、アフリカ難民への奨学金の支給など、活発に活動しています。

世界的に難民が急増するなか、日本にも大勢の人がやってきて難民申請をしています。認定されるのはごくごく少数です。大多数は申請を却下され、強制収容か仮放免という惨めな状態に置かれています。そういう難民に寄り添うのがメインの活動です。



具体的には、難民が作った
ビーズアクセサリを販売し、
収益で制作者を含めた難民の
生活支援や日本語教室、バス
ハイクやバーベキュー、阿波
踊りといった心を癒すイベン
トなどを行っています。
人生の後半に巡り合ったボ
ランティア活動を、附属の卒
業生と一緒に続けられるのは、
とても幸せなことです。新た
に活動に加わった方や見学に
みえた方に、活動の主なメン
バーは小学校や中学校のクラ
スメートなのだとお話する
と、皆さん一様にとても驚か
れ、羨ましいとおっしゃいま
す。確かに珍しい絆です。

RENでは一緒に活動をする方、賛助会員になってくださる方、ビーズ製品を販売する機会を提供いただける方を募集しています。附属小学校の卒業生がさらに加わってくれば、大変心強いことですし、きっとミニ同窓会のようになれるでしょう。力を貸していただける方、諸手を上げて歓迎します。

REN事務局アドレス:

refugeecampw.netwk@gmail.com

RENホームページ:

<https://www.ren-nanmin.org/>

お詫びと訂正

前号『藤棚』に掲載しました大森和子様からのお便りで、亡くなられた大森文吉さん(昭和十二年卒)の担任の先生のお名前を「木村先生」としてしまいました。たが、正しくは「木内先生」です。失礼をお詫びするとともに、訂正させていただきます。

青山荘とオリンピック

一九六七年(昭和四十二)卒 三組 辻 信作

昨年四月二十二日に行われた、学芸大世田谷附属小学校の創立一四〇周年記念式典に出席して、懐かしい校庭や教室等を見学して、記念授業も受講させていただきました。

附小を卒業してから五十年経ちますが、今でも楽しかった当時の情景や友人達の様子が、走馬燈のように脳裏を駆け巡ります。中でも青山荘と

一九六四年の東京オリンピックは鮮明に覚えていて、私にとって大切な思い出です。千倉の青山荘へは、二年生から六年生まで五回行きました。目の前が太平洋で、夜、大きな蚊帳の中で寝る時も、潮風、波の音が身近に聴こえていました。

海水浴は、近くのたけだ村(健田村)へトラックの荷台に乗って行きました。未舗装の道路に揺られながら風を切って走る荷台は、魅力的で楽しい体験でした。今では安全上あり得ませんが、おおらかな時代でした。砂浜の横に長

い堤防があり、五年生になると全員、堤防の先端から浜辺まで泳がされました。当時、クロールで五〇メートルくらいしか泳げなかった私は、ばたばたと手足を動かして、なんとか泳ぎ切りました。

また、青山荘ではゲームやイベントが盛り沢山でした。当時流行ったダッコちゃん人形のように、食堂の柱にどれだけ長くつかまっていられるかを競うゲームもありました。私は二位以下を大きく引き離して、五分間で優勝しました。

駒沢オリンピック公園は、以前はプロ野球東映フライヤーズの本拠地で、駒沢球場がありました。付近は草ぼうぼうの広大な原っぱでしたが、すっかり変わってしまい、びっくりしました。公園が出来た当時、塔と中央広場からの眺めは、まるで未来都市のようで、まぶしかったです。

東京オリンピックの一九六四年の時は四年生でしたが、駒沢で行われた東西ドイツ対ユーゴス



公益財団法人 東京都公園協会

ラビアのサッカーの試合の観戦に、学校から連れていっていたきました。初めて観るサッカーの国際試合でした。観る機会を与えてくださった先生方に、感謝の念に堪えません。結果は1対1のドローでした。終了後、お互いのチームが称えあうことに感動しました。

東京オリンピックは、数々のスポーツの感動と、世界の国に目を向ける機会を与えてくれたと思います。二〇二〇年の東京オリンピックでも、素晴らしい体験と感動を与えてくれることでしょう。

思い出の3組・上田学級

一九六三年(昭和三十八)卒 三組 貝増 美加子



私が上田先生に初めてお会いしたのは昭和三十四年の四月、旧建物の二階・三年三組の教室でした。当時は若手の代表だった上田先生が、黒板に「上田幸夫」と書かれた文字の美しさに思わず憧れてしまった事を覚えています。

国語が担当だった上田先生は、英語とアコーディオンが得技でした。当時はまだマイナーだったサッカーをこよなく愛し、私達にその魅力を熱く語り、夢中にさせてしましました。また、フォークダンスも先生のおかげで三組の特徴となりました。男子の中にはフォークダンスを嫌がる子もいたのですが、先生は何かあるとすぐ校庭でフォークダンスをするように指示なさい

ました。初めは洪々やっていた子達も徐々に男女を意識することなく、仲良くできる様になっていきました。

そして、他のクラスよりも男女仲良しの三組は、上田先生のアコーディオンの伴奏で、いつも歌声の絶えないクラスになったのです。上田先生の影響で明るく楽しい小学校時代の過ごせたのです。卒業式の時には、私達よりも早く先生が目には涙を一杯溜めて、生徒の名前を読み上げていらっしやったのを昨日の事のように覚えていきます。

附属世田谷中学に移っても、上田先生とのご縁は続きました。昭和三十九年の東京オリンピックの時に先生からお声がかかり、「スポーツ少年団」という活動に参加させていだいたのです。東京国立競技場でのボランティア活動や開会式のパフォーマンス等をさせていただきました。

二〇二〇年の東京オリンピックの話題をテレビで目にする度に、先生がお元気だったら、何らかの形で大会に参加する様に私達に働き掛けられたのではないかと思います。

大学を卒業して社会人になった頃から、誰が言い出した訳でもないのですが、三組のクラス会「青嵐の会」が毎年開催されるようになりました。途中で途絶えた時期もあったのですが、その都度誰かがまとめ役となり、上田先生は必ず出席されていました。先生が心臓を悪くなさってからは、先生の負担にならない様にと、ご自宅周辺の自由が丘や田園調布あたりの喫茶店でティータイムを2〜3時間、ご一緒させていただいており

ましたが、二〇一五年の真夏に先生は帰らぬ人となってしまいました。

先生の葬儀の時には、私ども青嵐の会を代表して仲間が弔辞を述べさせていただきました。そして、一周忌の後にはお墓参りもさせていただきました。

上田幸夫先生と附属小学校の思い出

一九七〇年(昭和四十五)卒 一組 浅尾 博之

一昨年、上田先生のご不幸を耳にして大変驚きました。

附属小学校でお世話になったことを懐かしく思い出すとともに、先生のご逝去を悲しく思いました。改めて、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

私は、五年、六年の二年間上田先生に担任をしていただきました。六年間の小学校生活の二年間でしたが、その間の思い出は、数えきれないくらいたくさんあります。

まず、上田先生の思い出と言えば、誰もが「紳士」、「おしゃれ」、「カッコいい」先生という印象が浮かぶのではないのでしょうか。大変な無礼を承知の上であえて申し上げれば、

今年の春には先生の奥様をお迎えして、久しぶりに盛大なクラス会を渋谷で開催しました。これからもこの青嵐の会を続けて行きたいと考えております。そして、上田先生のご冥福をお祈りいたします。

当時の私たちは「ちよっぴりキザ」という言葉で先生のことを表現していたように思います。常に、服装、態度とも気を配られていたように思います。また、当時研修であったと思いますが、ドイツに行かれた先生は、学級活動をはじめ、ことあるごとにドイツのすばらしさ、ドイツの文化、習慣、歌などを私達たちにお話しくださいました。アコーディオンを弾きながら、私達たちにローレライ、菩提樹、別れの歌(ムシデン)を教えてくださいました。今でも胸に浮かぶほどです。

また、子どもたちに感動的な体験をさせるのだと、林間

学校として燕岳登山を計画されました。二組の高田先生、三組の次山先生と準備や計画、安全への配慮などをきめ細かく行われていたことを、児童ながら感じておりました。

先生方のご努力により、我々は附属小学校燕岳登山の第一回目を経験することができました。苦しさを乗り越えて実感できる自己の成長を体験することができました。このことは、大人になっても困難を乗り越える力になっていると思っております。(登山本番は悪天候のため、燕山荘までしか行けませんでした。)

この他にも、漢字の書き取りが苦手だった私は、テストの点数が悪く、よく叱られました。まだまだたくさん思っている出がありますが、私にとって今でも自分を支える力になっていくことがあります。それは、国語の授業で、出藍の誉れと呼ばれる荀子の勸学篇第一について教えていただいたことです。「君子曰、学不可以已。青、取之於藍、而青於藍、冰、水為之、而寒於水。」で始まるこの著作の冒頭「学

不可以已」は、現在の私の座右の銘となっています。

今私は区立立馬中学校で校長として勤務しています。「学問は途中でやめてはならない」と説くこの言葉は、自らの信念とするとともに、卒業式の言葉などに織り込み中学生に伝えています。当時は気が付いていませんでしたが、私が教職を目指すきっかけになった言葉かもしれません。

たくさんさんの思い出が湧いてくるのは、上田先生に本当にお世話になったからだと思います。上田幸夫先生、ありがとうございました。

(大田区立馬込中学校校長)



高田早穂見先生の思い出

一九六四年(昭和三十九年)卒 二組

服部 誠

宮崎 繁幹

与芝(大貫) 薫

新沢(粉山) 由紀子

小田 俊理

高田早穂見先生が、昨年十二月にお亡くなりになりました。私たち八十八期生二組は、三年生から六年生までの四年間先生にお世話になり、昭和三十九年の卒業後は、「みくに会」と称して四年ごとのオリンピックの年にクラス会を開いてきました。昨年三月にお元気なお姿を拝見していたので、訃報を聞いて大変驚き、深い悲しみに打たれました。

暗記をさせられたことです。「ガマの油」「椰子の実」「雨にも負けず」などの丸暗記が宿題でした。

掛け算の九九を一分間に何問解けるかを競争し、一番速い人が「ジェット機」、次が「セスナ」などと称号が与えられました。また、ドッジボールを投げる強さを競い、横綱、大関と地位が与えられ、番付が後ろに貼り出されました。今ではこのように競争心をあおり、順番を付ける教育は出来ないかもしれませんが、しかし、当時高田先生は、良く出来たときに皆の前で褒めてくださいました。どんな子でも何か出来ることがあります。先生はそれを見つけて必ず褒めてくださいました。こうして私たちはやる気が出て、楽しい学校生活を送ることが出来ました。

高田先生は、とても情熱的に教えてくださいました。なんとと言っても思い出すのは、音楽の先生だった高田先生は、いつもアコーディオンを弾いてくださいました。教室だけでなく、遠足にも持ってきてくださり、外で唄ったりフォークダンスをしたりして楽しみました。(写真は五年生の授業参観の一コマです。先生の演奏に合わせて口を大きく開けて唄っています。)

高田先生は、とても情熱的に教えてくださいました。なんとと言っても思い出すのは、子育てが終わり、孫を可愛がるようになった今、つくづくなんと有り難い先生であったか、一人一人を大切にしてくださいました。改めて感謝の気持ちでいっぱいです。



平成28年度(平成28年4月1日～平成29年3月31日)青山附属同窓会 会計報告

2. 経常会計(単位:円)

収入	金額	支出	金額
前年度より繰り越し	11,397,057	H27藤棚印刷費	483,087
		名簿印刷費	407,508
会費入金	5,075,000	キーホルダー	0
		回線使用料	66,619
銀行利息	666	データ管理費	179,496
		事務手数料	184,100
		H27藤棚・名簿発送費	731,164
		通信費・はがき印刷代	2,533
		事務用品費	5,400
		慶弔費・交際費・会議費	78,058
		交通費	0
		振込手数料	109,555
平成27年度収入合計	5,075,666	140周年記念式残費用	47,304
		会費返金	5,000
140周年記念品買取	5,265	本年度支出計	2,299,824
140周年記念参加費	3,000	次年度へ繰越	14,181,164
合計	16,480,988	合計	16,480,988

1. 同窓会基金(単位:円)

収入	金額
前年度より繰り越し	3,303,071
銀行利息	828
証明書手数料	216
合計	3,303,683

3. 資産の部(単位:円)

明細	金額
同窓会基金分	
三菱UFJ信託銀行	3,303,683
合計	3,303,683
経常会計分	
三井住友銀行	7,257,253
ゆうちょ銀行	6,717,450
現金	206,461
合計	14,181,164
基金+経常会計合計	17,484,847

会計監査承認 会計監事 吉原重和 松本洋典

名簿の発行について

前回の名簿発行から五年が経ち、新しい名簿をお届けすることとなりました。名簿は、会費納入者として一九四九年以前の卒業生を対象に、「藤棚」と一緒にお届けしました。

ご健在の同窓生約一万人のうち、七千名を超える方の住所が判明しています。住所や電話番号はご希望で不掲載にできますが、九割以上の方がいずれかの連絡先を掲載されており、皆様がクラス会を開かれるときなどに、大変有効にご活用いただけていることと思います。

同窓生をつなぐすべての活動の基礎となるのが名簿です。今後とも、ご理解とご協力をお願いします。

※会費納入がまだの方には、払込票を同封していますので、ご協力ください。名簿は在庫がある限りお送りします。

(常任幹事・野口尚志)

●予告 懇親会の開催

来年二〇一八年に、懇親会を開催する予定です。

これまで同窓会では、三年に一度、懇親会を開催してきました。来年もまた、多くの同窓生に参加していただけるよう、準備してまいりたいと思いますので、どうぞふるってご参加ください。詳細は、次号「藤棚」の紙面にてご案内させていただきます。

◆本年度の同窓会役員

会長 長 庭山正一郎(昭和三三年)
幹事長 森 昭彦(「三〇年」)
会計監事 吉原重和(「三五年」)
松本洋典(平成 八年)
常任幹事 小野聖穂(昭和二九年)
幣原 廣(「三七年」)
一力健一郎(「五〇年」)
岡市典子(「五三年」)
斉藤研一(「五四年」)
野口尚志(「六三年」)
瓶子可南子(平成八年)
日野真毅(「二五年」)

計 報

高田早穂見先生(一九五四年六月～八六年三月在職)が、二〇一六年十二月に逝去されました。享年九〇歳でした。

「青山荘音頭」は言うまでもなく、讚美歌二四三番「ああしゆのひとみ(神の招き)」ほか、たくさんのごども讚美歌も作曲されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

現在の藤が池



私(編集者)の在学当時は、周囲に雑草が生い茂り、池の水はよどみ、近寄りたがたい雰囲気でしたが。今は、とってもきれいな藤が池です。